

## 歴史をつなぐ

園長 児嶋 草次郎

新年あけましておめでとうございます

昨年も色々と御支援いただき、またご指導いただき、おかげさまで平和に年を越し、新しい年を迎えることができています。昨今、地球も人間も病んだような社会状況となって来ていますが、与えられた仕事に粛々と取り組んでまいります。

来年は、石井十次没後 110 年、児嶋虜一郎生誕 110 年を迎えます。それに向けての記念事業、共生施設「友愛の森」(高鍋)、母子生活支援施設「みどりホーム(仮称)」(都城)設置に向けて、全力で取り組んでまいります。引き続き御支援、御指導、よろしくお願い致します。

さて、昨年の反省をもとに、新年度に向けての課題を、3点ここに上げさせていただき、これから整理していきながら、職員や子供たちと決意を新たにしていきたいと思えます。

#### 1、茶臼原の大自然との共生について整理し直す

11月に2回に分けて行った職員研修旅行「友愛のルーツを捜す旅」で、新たに浮かびあがって来た課題というか本質的な課題、「自然との共生」について、もう一度整理し直す必要性を、職員たちの提出したレポートを読みながら、強く感じています。

この大自然の中で、子供たちの養育・教育をするために、大きなリスクを犯して岡山からこの宮崎に施設を移したのに、100年後の現在の私たちは、この大自然を十分に活かしているのか。そう問われているような気がして来ました。

石井十次は、「時代教育法」を次のように説明しています。「幼年は遊ばせ、少年は学ばせ、青年は働かせる」。つまり、10歳以下の子供は茶臼原の大自然の中で自由自在に遊ばしめる。10歳を越えたら、岡山につれ帰り小学教育を受けさせる。そして、16歳になったら、院内で実業教育を授けるか農工商家に奉公させる。これは明治時代の教育制度の枠組みの中での考え方ですので、現在そのまま実施することはできませんが、重要なところは、「10歳以下の子供を自然の中で自由自在に遊ばしめる」というところ。自然教育と言ってもよいでしょう。

石井記念友愛社現在の方針でも、「自然主義」として掲げています。次のように説明しています。「日本の自然・風土・文化・農業との触れ合いを通し、人格と体を養う。自然教育は情操を豊かにし、『敬天』の感性を育てる。」

そして、実践目標として次の3点をあげています。

- ①自然への畏敬と感謝の気持を育てます。
- ②食育教育を実践しています。
- ③自然教育・労作教育を実践します。

ここで課題として取りあげるならば、③の「自然教育」です。「労作教育」については、中・高生に実施しており、それなりの成果を出すこともできています。しかし、石井十次が10歳以下の子供は自然の中で自由自在に遊ばしめると言ったにもかかわらず、小学校時代までの自然教育が現在不十

分だと気付かされるのです。

自分自身の少年時代を思いかえしてみても、自然との触れ合いで思い出に残るシーンは、ほとんど小学生時代の体験です。感性を育て人格の基盤を作るには、自然との交流が重要であるとあらためて感じます。その体験の上に労作教育が来なければならないのでしょうか。

ところが、友愛園において、小学校時代の「自然教育」が弱いと判断せざるを得ないのです。中・高生たちの労作の時間、小学生の子供たちの活動は、ほとんど静養館や方舟館周辺の庭掃除ですが、1時間弱で終ると、サッサと館内にあがってしまっています。花作りや散歩などもほとんど見られません。私は若い指導員時代、作業のあい間によく周辺を子供たちと一緒に散歩したのですが、現代の若い職員たちは少年時代、山歩きや基地作りなど、自然体験があまりなかったのだろうというのが、最近の私なりの分析です。だとするならば、ちゃんと「自然教育」についてのカリキュラムを作り、マニュアル化しなければならいだろうと思っています。職員たちと一緒に自然教育への認識をもう一度新たにし、岡山から宮崎への移住の結果をアピールし続けれるようにしていかなければならないでしょう。

## 2 「運命を変える」ことの意味を、職員・子供たちにより丁寧に伝える

京セラの稲森和夫氏が、昨年令和4年8月に90歳で亡くなりました。直接お会いしたことはもちろんありませんが、氏が私財を投じて作られた京都市内の児童養護施設には見学に行っていたことがあります。御著書を何冊か拝読し、多くを学ばせていただきました。

月刊誌「到知」では、12月号で氏を追悼特集し、2013年の大阪での講話が収録されていました。題は「人は何のために生きるのか」。稲盛氏の御著書は何冊か子供たちの図書に並べています。子供たちの運命を変えるための知恵と勇気が得られると確信するが故です。

子供たちには常々、自分たちの運命を変えるための修行の場が友愛園の生活だと話しています。親から虐待を受けたり、ネグレクト状態に置かれたりして、強い人間不信を抱えて入所してくる子供が多いのですが、人間を恨み、グチや不満を園生活で発散するだけでは、その運命は何も変わらないのです。それどころか、そんなマイナス思考の状態のまま社会に出れば、当然すぐ人間トラブルを起こし、社会から落伍していきます。世間がよく言う貧困の連鎖をただ繰返すだけの人生になってしまいます。時は待つてはくれず、子供の肉体はグングン成長していき、職員の方も何とか良い方向へ導きたいのですが、そのマイナスのエネルギーに圧倒されているうちに、卒園してしまうということもあるのです。若い職員個人の価値観だけでは、とても子供たちの運命を変えることなどできません。もちろん誠実に園生活、自分に向き合い、運命を逆転させ、しっかりした所に就職したり、大学に進学したりする子もいますが、くやしい思いで送り出す子もいるのが現実です。

人間は出会いによって変わっていきます。まず職員自身の価値観・人生観をしっかり構築し、寝食を供にする子供たちがその生活姿勢に感化され、変るきっかけをつかむというのが理想です。稲盛和夫氏のその講話録をコピーして、職員会の時に配りました。

稲盛氏は鹿児島市内で生まれ(1932年)、戦時中、旧制中学を2年続けて受けるが不合格となり、私立の中学校へ進んでいます。その頃、肺結核にもかかったとか。これは大きな挫折です。印刷業を営んでいた実家が空襲で焼け、生活の方も困窮したそうです。大学の第一志望は医学部でしたが、不合格で、仕方なく鹿児島大学の工学部に入学。就職難の時代で大企業に次々振られ、大学の先生の尽力で、京都の碍子(がいし)作っている会社になんとか就職。戦後ずっと赤字続きの会社だったそうです。「私は会社の粗末な研究室で、命じられた新しい時代に必要となるファインセラミックスの研究に没頭し始めました。」と述べられています。それから、27歳の時に仲間と一緒に、「京都セラミ

ック（現京セラ）を立ち上げられるのです。

稲盛氏は、悩んだ若い頃に出会った中国の「陰騭録（いんしつろく）」という本を解説した、安岡正篤（まさひろ）著「立命の書『陰騭録』」を引用しながら、次のような言葉を紹介しています。

「我々には皆、それぞれ運命というものが備わっています。しかし、その運命のままに生きるバカがいますか。運命というのは、変られるのです。因果の法則というものがあ、人生を運命のままに生きていく途中で、善いことを思い、善いことを実行すれば、運命は良い方向へと変わっていきます。」

そして、81歳の稲盛氏は次のように振り返られます。

「私は『災難に遭おうとも、幸運に恵まれようとも、どんな試練であろうとも、それを感謝の心で受け入れていこう』と考えてまいりました。」

『『どのような災難に遭おうとも、それは試練として神が私に与えてくれたものだと受け止め、前向きに、ひたすら明るく努力を続けていく生き方をしていこう』

私はそのように思い、そういう人生を生きてきたつもりです。」

また次のようにも述べられています。『『利他の心』。他を利する。優しい思いやりの心だけで懸命な努力を続けている私を見て、神様あるいは天が哀れに思い、手を差しのべてくれたのではないだろうか。』

以上のような稲盛氏の言葉を、いかにして職員や子供たちに伝えていくのか。単に書籍を並べるだけではなく、その伝え方を研究しなければなりません。

### 3、石井記念友愛社の歴史を、次の世代にどう伝えていくのか

岡山孤児院の歴史は、明治20年に始まり大正15年に閉じられたとするならば、39年の歴史です。それに比べ、石井記念友愛社の歴史は昭和20年に始まり、今年で78年の歴史を刻むことになります。40年近く岡山孤児院の歴史より長いのです。立ち止まって考えれば妙な驚きです。

私も70歳を過ぎて、いつお迎えが来てもおかしくないような老境にはいつて来ています。この石井記念友愛社の歴史を次の世代にどう伝えるのかというのが、大きな課題となって来ています。

そもそも歴史とは何なのか。今、ロシアが隣国のウクライナに侵略していますが、現代の欧米の価値観からするならば、あのヒトラーと同じレベルのことをプーチンはやっているということになるのかもしれない。しかし、プーチンも人間です。いずれ終末は訪れます。ロシア国民の多くは、この戦争を国の恥として苦悩されていることでしょう。陰の多いロシアの歴史ですが、近い将来、きっとキッチンと修正して、子供たちが誇りにできる国として蘇ることでしょう。

私は、この石井記念友愛社の中で生まれ育ち、そして、一職員として働いて来ました。陰・陽、どちらも見、また体験して来ましたが、誇りにしたいこともいっぱいあります。私にとっては、この石井記念友愛社の歴史そのものが、私のアイデンティティを形成しているのです。私が一番考えなければならないことは、この石井記念友愛社で育った子供たちにとって、その歴史は、自信や自己肯定につながるようなものでなければならないということ。色々つらいこともあったが、あの時の生活・修行が厳しい社会の中で生き抜いていく、あるいははい上がっていく力になったと、前向きに評価できる歴史でなければならないのです。

私が生きているうちに、静養館の西側にある倉庫を改修して、石井記念友愛社の、戦後の歴史資料館にしたいと考え始めています。この仕事をするようになってずっと言い続けて来た、「戦後の石井記念友愛社の歴史は岡山孤児院文化の発掘作業です。」をぼちぼち卒業して、胸を張って、石井記念友愛社の精神・文化を次の世代に語り始めるべき時が来ているのではないかと思います。

そういうことをアレコレイメージしている時に、まず思い浮かんできた人物は、やはり柿原政一

郎先生でした。父鳩一郎の恩人として、石井記念友愛社の生みの親として、正當に評価していかねばなりません。この友愛通信で柿原先生のことは何度か書かせていただいています、職員や子供たちは、その存在についてほとんど知らないと思います。岡山孤児院の歴史もこの茶臼原のことも何も知らない父鳩一郎を、石井十次の孫だからということでこの茶臼原に導いてくださり、自分は常に一歩ひいた所から、支え続けてくださいました。

話は少し脱線しますが、最近、柿原先生に関する二つの情報が飛びこんで来ています。

一つは、岡山の難波美智子様から、彫刻家宮本隆氏（故人）の家で、柿原氏の胸像の原型を発見したという知らせ。その後、息子さんの宮本工様とも連絡が取れ（11月）、お手紙で「差し上げます」という御返事をいただいています。歴史資料館の第1号の資料となることでしょう。

もう一つは、少々がっかりしたニュースです。旭化成の創業者野口遵（したがう）氏を顕彰し、また創業100周年を記念する野口遵記念館が、延岡市にオープンしたというニュースが宮崎日日新聞の3面を使って大きく報じられました（12月18日付）。それはそれでおめでたいことですが、野口遵氏の生涯をまとめた記事の中に、柿原氏の名前が出て来てなかったのです。参考文献として「旭化成80年史」があげられていましたので、おそらく、その中でも柿原氏の名前はでてなかったのでしょう。

伝記「柿原政一郎」（柿原政一郎翁顕彰会）の中には、広島で大規模な化学工業を起こそうとした野口氏が漁民の反対で挫折したのを見て、宮崎に導いた旨の記述がなされているのです。これが事実であるならば、旭化成は何らかの事情で無視するとしても、宮崎県民は正當に業績として評価すべきでしょう。歴史の一コマとして次世代に伝えていくべきでしょう。歴史が次の世代の子供たちに勇気と希望と誇りを与えるものとするならば、柿原氏のその行動は、記述すべき歴史の一ページです。